日本語版 Reminiscence Functions Scale(RFS)作成の試み(1)

—大学生を対象として—

○瀧川真也¹・仲真紀子²(¹川崎医療福祉大学医療福祉学部・²北海道大学大学院文学研究科)

キーワード: 日本語版 RFS, 回想, 青年期

Development of Japanese Reminiscence Functions Scale (1)

Shinya TAKIGAWA¹, Makiko NAKA²(¹Faculty of Health and Welfare, Kawasaki University of Medical Welfare., ²Graduate School of Letters, Hokkaido University.)

Key words: Japanese Reminiscence Functions Scale, reminiscence, adolescence

【目 的】

回想(ライフレビュー)について, Butler(1963)は, “自分の死を意識することで起こる自然な心的過程”としている。これまでの研究により, 高齢者が過去を回想することで, 心理適応が高まる可能性が指摘されている(黒川,2005; 野村,1998; 野村・橋本,2006)。

また, Webster(1993, 1997)は 17-91 歳までの参加者を対象に回想機能についての調査を行った。その結果, 回想機能には“退屈の軽減”, “死の準備”, “アイデンティティ”, “問題解決”, “会話”, “親密さの維持”, “辛い経験の再現”, “知識・情報の提供”の 8 つの機能があることが明らかになった。彼はこの結果から, 回想をどのような目的で行うかを調べる尺度である“Reminiscence Functions Scale(RFS)”を作成した。

RFS を用いた先行研究により, 回想機能は年齢によって異なることが明らかにされている。例えば, 青年期は老年期と比べ, “辛い経験の再現”, “アイデンティティ”, “問題解決”の得点が高く, 中年期では“知識・情報の提供”得点が増加する。そして, “死の準備”得点は老年期で特に高くなるとされている(Webster,1993,1995,1998; Webster & McCall,1999)。さらに, Webster & Gould (2007)は, 青年期は自己機能のために回想することが多く, その一方で, 老年期は社会的機能のために回想することが多いことが明らかにしている。しかし, 日本において回想機能の研究は少なく, さらなる検討が必要である。そこで本研究は, 日本語版 RFS を作成するとともに, 日本の青年期における回想機能の特性について検討する。

【方 法】

調査対象者と手続き

大学生・大学院生 255 名(男性 86 名, 女性 169 名)で, 平均年齢 18.99 歳(SD=1.34), 年齢幅 18~27 歳であった。質問紙は大学の講義内で一斉に実施し, その場で回収された。所要時間は 10 分であった。

質問紙

はじめに, 原著者の許可を得た上で原版 RFS の日本語訳を行った。次に, 第三者が日本語訳された RFS の back translation を行った。最後に, back translation された内容について原著者に確認を求め, 原版と日本語版の整合性が確認された。RFS(43 項目)は, 回想を行う目的について, 6 件法(1.まったくなく~6.非常によくある)で回答を求めるものである。

【結 果】

RFS の 43 項目に対し, 因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った。因子設定の基準を, 固有値 1.00 以上, 因子負荷量.30 以上とし, 総合的な検討を加え, 6 因子構造(42 項目)が妥当であると判断した。6 因子解による累積寄与率は 53.69%であった。

第 1 因子(10 項目)は, 原版の“死の準備”や“情報・知識の提供”といった, 中高年期の回想機能としてみられる因子項目を多く含むものであった。第 2 因子(12 項目)は, “アイデ

ンティティ”や“問題解決”といった, 青年期に多く見られる自己機能にかかわるものであった。第 3 因子(5 項目)は“退屈の軽減”, 第 4 因子(7 項目)は“会話”, 第 5 因子(3 項目)は“親密さの維持”, 第 6 因子(5 項目)は“辛い経験の再現”をそれぞれあらわすものであった。なお, 懐かしさ尺度の全体の α 係数は.914 であり, 内的妥当性は確認されたといえる。

次に, 青年期の回想機能の特性を検討するために, RFS の各因子得点について分散分析を行った(Figure)。その結果, 第 2 因子(アイデンティティ, 問題解決)の因子得点は, 他の因子より有意に高かった(すべて $p<.01$)。また, 第 1 因子(死の準備, 情報・知識の提供)の因子得点は, 他の因子よりも有意に低かった(すべて $p<.01$)。

Figure 日本語版RFSの因子得点

【考 察】

本研究から, 先行研究(Webster,1993,1997)と同様, 回想は複数の機能を有していることが明らかとなった。また, 青年期では, 回想をアイデンティティの維持・確認や問題解決など, 自己に関わる機能として多く用いられることが示された。この結果は Webster & Gould (2007)と一致する。

しかし, 本研究から得られた RFS の因子構造は, Webster(1993,1997)とは異なるものであった。その原因の 1 つとして, 年齢による回想機能の特性の異なりがあげられる(Webster,1993,1995,1998; Webster & McCall,1999)。本研究では対象者が青年期の大学生のみであり, 死の受け入れや若い世代への情報・知識の伝達を回想機能として用いることが少ないと考えられるため, 異なる因子構造が得られたのではないだろうか。このことから, 今後は, 青年期から老年期までを対象として, 日本語版 RFS の信頼性, 妥当性を検討する必要がある。また, 年齢による回想機能の異なりについてもさらなる検討が必要であろう。

【引用文献】

- Webster, J. (1993). Construction and validation of the Reminiscence Functions Scale. *Journals of Gerontology*, 48(5), 256-262.
 Webster, J. (1997). The reminiscence functions scale: A replication. *International Journal of Aging & Human Development*, 44(2), 137-148.